

令和 7 年 9 月 10 日現在

機関番号：32689

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A））

研究期間：2020～2024

課題番号：19KK0302

研究課題名（和文）ハワイ語新聞を一次資料とする危機言語の復活とメディア利用に関する談話分析的研究

研究課題名（英文）A discourse analytic study on the revitalization of endangered languages and media use, based on primary sources from Hawaiian language newspapers

研究代表者

古川 敏明（Furukawa, Toshiaki）

早稲田大学・社会科学総合学院・教授

研究者番号：90609372

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,500,000円

渡航期間： 12ヶ月

研究成果の概要（和文）：研究期間全体を通じては、危機言語の復活とメディア利用に関する基課題を発展させるため、メディアとして想定していたラジオより長い歴史を持つ別のメディアである新聞を研究対象とした。特に2022年8月から2023年7月には、アメリカ・ハワイ州に滞在し、現地で集中的な調査を行った。主たる研究成果として、日英語での論文発表、シンポジウムを含むイベント実施を挙げることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は日本とハワイ王国が関与するテーマで、ハワイ語新聞を一次資料として用いた最初の学術論文を発表した。また、論文をハワイ州に基盤を置く媒体に発表できたことで、先住民研究者たちとの関係構築を深めることができた。社会的意義としては、ハンセン病問題に取り組む福祉団体から寄稿依頼を受けたり、明治期の日本に渡った先住民が治療を受けた医師の子孫とその家族から問い合わせを受けたりとしたこと挙げたい。さらに、国際シンポジウムではハワイ先住民研究者が約20名集い、日本での学術的イベントとしては初のことだった。同グループの滞在中には、閲覧が困難な日布修好通商条約の原本を外交資料館で参照する学術交流も実現した。

研究成果の概要（英文）：Throughout the research period, the study focused on newspapers, an alternative form of mass media with a longer history than radio, which had initially been considered the primary medium, in order to further develop the core research project on the revitalization of the Hawaiian language and media use. From August 2022 to July 2023, intensive fieldwork was conducted on-site during a stay in the state of Hawaii, USA. Key research outcomes include the publication of papers in both Japanese and English and the organization of events, including an international symposium.

研究分野：言語学

キーワード：ハワイ語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

言語コミュニケーション研究は、主に英語や日本語など世界的に見て話者数の多い大言語を対象として発展してきた。近年、英語などに限定されない多言語使用や第二言語使用を分析対象とすることで、会話研究への貢献を目指す動きがある。

ハワイ語は消滅の危機に瀕した言語（危機言語）であるが、言語再活性化の成功例としても知られている。ハワイでは複数の首長が統治する時代を経て、王国建国（1810年）、王国転覆と共和国の成立（1893年）、アメリカへの併合（1898年）、アメリカの50番目の州になる（1959年）という統治形態の変遷があった。19世紀末にはハワイ語が教育言語として禁じられ、ハワイ語を教育言語とする学校や話者の減少があったが、1960年代から1970年代にかけて公民権運動の影響を受け、ハワイでも先住民の言語と文化の復興運動が熱を帯びた。1980年代には就学前児童をハワイ語で教育するプーナナ・レオと公教育の一部としてカイアプニ・ハワイが設立され、現在では大学院の博士課程までハワイ語を教育言語として学べる制度が整っている。また、現在では、1980年代にハワイ語で教育を受け、いわば新たな母語話者となった最初の世代が30代の親世代となり、次世代への言語継承は新たな段階を迎えている。

報告者は基課題として、話者数としては2万人程度のハワイ語共同体に着目し、会話分析における連鎖分析とカテゴリー分析を行ってきた。ハワイ語を放送言語とする1972年から2000年のラジオ番組を主たる分析対象として、言語の復活とメディア利用を探究していた。基課題が分析対象とするラジオ番組カ・レオ・ハワイ（Ka Leo Hawai'i、以下KLH）は第1期と第2期があり、ホノルルのラジオ局KCCNで放送されていた。第1期は1972年から1988年まで（全417回）、第2期は1990年から2000年まで（全383回）放送された。番組は年配の母語話者をゲストとして招き、言語文化の記録を目的としたインタビューを行った。これらはデジタル化され、貴重な資料・教材として言語の再活性化に利用されてきた。一方で、ラジオに関する基課題を進めていく中で、言語の復活とメディア利用の関係を探究するためには、車の両輪であるハワイ語新聞の調査も実施する必要性が強く意識されるようになった。

ハワイ語史を紐解くと、1778年の西洋との接触後、1834年にハワイ語新聞が登場し、それから数年のうちにほぼ全ての先住民が識字を獲得したと考えられている。また、新聞登場から138年後、先住民文化の復興運動や主権回復運動の潮流の中で登場してきたのが1972年に放送を開始したラジオ番組KLHだった。19世紀から20世紀にかけて母語話者が著しく減少し、ハワイ語を教育言語とする学校がなくなるなど、衰退の一途をたどったハワイ語にとって、新聞とラジオは言語の復活への切り札だった。伝統的な口承文化を土壌として新聞による文字の文化が成立し、さらにラジオという新しいメディアが誕生すると、この新しいドメインで要求される独自のレジスターを創出する試みは、それまでの文字の文化の蓄積を利用する形で進んで行ったと推測される。だからこそ、ラジオに関する基課題と新聞に関する本研究を並行して実施する必要がある。

本研究を行う必要性を高めているのは時間的制約である。年配の母語話者はごく少人数であり、そうした話者と接点があった世代の高齢化も進んでいる。次に、ハワイ語新聞から抜粋・編集され、英語に翻訳された出版物が「聖典化」され、研究の遂行には既存の英語翻訳資料だけで十分という抑圧的な言説が一次資料にあたる必要性を否定してきたことが指摘されている。これまで、言語学、人類学、政治学、歴史学などの分野で、ハワイ語新聞を一次資料とする研究成果が発表され、英語翻訳に依存する既存の研究の限界が幾度となく示されてきた。しかしながら、ハワイ語新聞を応用しようという機運が高まり、先住民以外の問題を扱う研究者にもその可能性が認識されつつある。しかし、日本においては、関心を持つ研究者の多くがハワイ語資料を読み解くという実際的な制約に直面し、具体的な成果として結実していない。本研究の代表者はまさにこの遂行能力を有し、協力者も確保して研究体制を整えながら予備調査を実施し、さらなる調査を展開・発展させる段階にあった。

単独の予備的調査の結果、19世紀末の明治期の日本（東京・芝）に滞在していた一般のハワイ先住民の存在を初めて明らかにした。ハワイ語新聞という新資料を用いることで、ハワイから日本への人の移動の一端に光を当てることができ、主に日本からハワイへの人の移動を研究してきた従来の移民研究とは異なる成果を上げることができる。こうしたプロジェクトをさらに推進していくためには、国際共同研究が不可欠であった。

さらに、19世紀末に存亡の危機にあったハワイ王国は、当時、国の命運を握る有望な先住民の若者を欧米諸国に留学させる Study Abroad Program を実施していた。ハワイ大学ではこのプログラムについて研究が進められているのだが、日本に留学していた人物たちについては明らかになっていないことが多い。本研究の代表者は学習院大学のアーカイブズを訪問し、1880年代に当時の学習院に留学していたハワイ先住民の兄弟（アイゼツキとゼームス）について資料を閲覧し、調査を開始していた。この事例もハワイから日本への人の移動に関する研究を補完するものであり、ハワイ大学で進行中の研究と連携することを目指していた。

2. 研究の目的

本研究は言語の復活とメディア利用を探究するため、19世紀のハワイ語新聞を新資料とする談話分析を行い、(1)言語復活運動の一環である新聞のアーカイブ化と共同体の言語イデオロギーの関係を明らかにするとともに、(2)新聞から影響を受けたラジオに特有の発話とハワイ語の雑種性を明らかにする。また、本研究はハワイ語新聞を一次資料として日系移民史に迫る初

の試みでもあり、(3)日本関連記事を枠付ける先住民の世界観を明らかにすることで日本・日系関連の歴史と記憶の再定義を試みる。新聞とラジオは言語復活運動の両輪として、相互に影響を与えながら貴重な文化資源を構築してきた。国際的な枠組みを持つ本研究をラジオに関する基課題と並行して実施し、相互補完的に両者の研究計画を発展させる。

3. 研究の方法

1 点目の新聞のアーカイブス化については、複数の図書館司書をインフォーマントとして聞き取りを実施し、歴史・談話的観点からデータを分析する。危機言語復活の一環として実施されていた文字資料のアーカイブス化を促進・阻害する要因として、どのような言語イデオロギーが共同体の内外で作用していたか明らかにする。

2 点目の新聞(文語)とラジオ(口語)の接点探求では、基課題で構築した音声と文字起こし資料のデータベースに加え、ラジオ以外の音声資料(博物館で閲覧・視聴できる音声資料)さらに新聞の言語表現や談話構造の3種のデータを比較することで、ラジオという制度的場面に特有の発話スタイルとその背後にあるイデオロギーを検証する。

3 点目の日本関連記事の調査としては、Nūpepa.org や Papaki lo など既存のデータベースを海外共同研究者と再分析するとともに、現地の博物館にて、未だ電子化されていない新資料を探索して分析し、記事を構築するハワイ先住民の視点・世界観を明らかにする。

4. 研究成果

まず、新聞のアーカイブス化としては、病気治療を目的として19世紀末に日本・ハワイ間を移動した先住民の存在が明らかになり、この人物と関連する人物たちに関わる記事を収集していくことで、約80の記事をリストアップすることができた。(新聞記事以外の資料も多数収集したが割愛する。)一般公開できる状態にはないが、研究協力者と共有することは可能な状態であり、共同プロジェクトへ展開していくことを目指している。

次に、新聞とラジオの接点探求としては、この問題を探究するのに役立つラジオの音声ファイル特定することができたことに加え、現地滞在中に開催された国際学会でも関連する発表をした先住民研究者と情報交換することができた。ハワイ語のコーパスを用いた研究を行っている日本の言語学者と共同研究を実施することで、次の段階へと進めることができるだろう。

しかしながら、現地滞在を開始すると、当初の3つの研究目的のうち3つ目について最も有望な成果を挙げることができる見込みが高まり、結果的にこれに注力することとなった。最終年度には日英語での論文を発表し、シンポジウムを含むイベントを実施した。ハワイ語新聞を一次資料として用いた日本語論文「ハワイとハンセン病:先住民による日布間移動」については、発表後、ハンセン病問題に取り組む福祉団体から寄稿依頼を受けたり、明治期の日本に渡った先住民が治療を受けた医師の子孫とその家族から問い合わせを受けたりという一定の反響があった。その後、日本語論文の拡張版である英語論文をハワイの歴史研究をテーマとする学術誌に発表した。これらの論文は、日本とハワイ王国が関与するテーマにおいて、ハワイ語新聞を用いることで、新たな事実を明らかにした最初の研究である。

特に英語論文をハワイ州に基盤を置く媒体に発表したことで、先住民研究者たちとの更なる関係構築を進めることができた。その結果、ハワイ大学から来日した先住民研究の教員および学生からなる約20名が参加した国際シンポジウム「イヤーパナ再訪:19世紀のハワイ王国と日本」を早稲田大学にて開催し、日本側参加者も含めて40名を超える規模の会となった。ハワイ先住民研究者がこれだけ集った学術イベントは、日本で開催されたものとしてはおそらく初めてだろう。さらに、同グループの滞在中には、外交資料館スタッフの協力を得て、1871年日布修好通商条約の原本などを閲覧するという学術交流を実現することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古川敏明	4. 巻 30
2. 論文標題 ハワイとハンセン病：先住民による日布間移動	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 移民研究年報	6. 最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古川敏明	4. 巻 2023
2. 論文標題 地名「カブーカキー」と「レッドヒル」の指標性：ハワイの環境汚染問題をめぐる公聴会の会話分析	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大阪大学言語文化共同研究プロジェクト2023 応用会話分析研究	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/97325	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toshiaki Furukawa	4. 巻 58
2. 論文標題 He leta mai lapana mai: A Native Hawaiian Hansen's disease patient leaving for Japan in the late nineteenth century	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 The Hawaiian Journal of History	6. 最初と最後の頁 49-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古川 敏明	4. 巻 2022
2. 論文標題 言語再活性化運動とニューノーマルの実践：コロナ禍のハワイ語ウェビナー 'Ai Kōleを事例として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト	6. 最初と最後の頁 14～23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/91557	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古川敏明
2. 発表標題 移動するハワイ先住民: 19世紀末に来日したケアヴェアマヒの事例
3. 学会等名 日本オセアニア学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 古川敏明
2. 発表標題 ハンセン病治療のために来日したハワイ先住民 - ハワイ語新聞を手がかりに -
3. 学会等名 日本移民学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 古川敏明
2. 発表標題 1880年代に来日したハワイ先住民たち
3. 学会等名 ハワイ研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古川敏明
2. 発表標題 地名「カプーカキー」と「レッドヒル」の指標性：ハワイの環境汚染問題をめぐる公聴会の会話分析
3. 学会等名 公開シンポジウム「政治・経済・外交の相互行為実践 - アメリカ議会公聴会の会話分析」（招待講演）
4. 発表年 2025年

1. 発表者名 Toshiaki Furukawa
2. 発表標題 A Poem Honoring King Kalakaua 's World Tour: Focusing on the Case of Haku Mele, David Keaweamahi
3. 学会等名 国際シンポジウム Revisiting Iapana: The Hawaiian Kingdom & Japan in the 19th Century
4. 発表年 2025年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 古川敏明 (分担執筆)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 312
3. 書名 ポエティクスの新展開	

1. 著者名 古川敏明 (共著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 155
3. 書名 ハワイ語で話そう	

1. 著者名 古川敏明 (分担執筆)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 284
3. 書名 モビリティとことばをめぐる挑戦-社会言語学の新たな「移動」-	

1. 著者名 古川敏明 (分担執筆)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 丸善書店	5. 総ページ数 790
3. 書名 オセアニア文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>国際シンポジウム「イアーパナ再訪：19世紀のハワイ王国と日本」 https://www.waseda.jp/fsss/iass/news/2025/02/19/4434/</p>

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ディーン カミル (Deen Kamil)	ハワイ大学マノア校・言語学研究科・教授	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
その他の研究協力者	ノーゲルマイヤー プアケア (Nogelmeier Puakea)	ハワイ大学マノア校・名誉教授	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
その他の研究協力者	コガ ラレパ (Koga Lalepa)	ハワイ大学マノア校・ハワイ語センター・講師	
その他の研究協力者	シム カペナ (Shim Kapena)	ハワイ大学マノア校・公共サービス部・司書	
その他の研究協力者	ウィリアムズ ロン (Williams Ron)	ハワイ州立公文書館・公文書館員	
その他の研究協力者	アチュー カペナ (Achu Kapena)	ハワイ州立公文書館・公文書館員	
その他の研究協力者	フクシマ サホア (Fukushima Saho)	ビショップ博物館・博物館員	
その他の研究協力者	デュラント ローリー (Durand Laurie)		
その他の研究協力者	ソラトリオ カハヌオラ (Solatorio Kahanuola)		
その他の研究協力者	ジョンソン クーリア (Johnson Kulia)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
その他の研究協力者	土肥 麻衣子 (Doi Maiko)		
その他の研究協力者	バルツキ ナラニ (Balutski Nalani)	ハワイ大学マノア校・先住民学生サービス・研究評価専門員	
その他の研究協力者	ホロカイ (Holokai May)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Revisiting Iapana: The Hawaiian Kingdom & Japan in the 19th Century	開催年 2025年～2025年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------